天祖神の大道祝詞

一礼二拍手一礼

天祖神（おおみかみ）　賛言（たたえこと）

オホミカミ　トホカミ　エミタメ　ヒフミヨイ
オホミカミ　ヒフミヨ　イムナヤ　コトモチロ

清大祓（きよめのおおはらい）

掛巻（かけま）くも綾（あや）に畏（かしこ）き
天地根本太御祖大神（あめつちもとのおおみおやのおおみかみ）
元津神（もとつかみ）　天津神（あまつかみ）　地津神（くぬつかみ）　国津神（くにつかみ）
百千万億兆（もちろらね）の神々（かみかみ）の御前（みまえ）に

春は雄大しく煙噴く阿蘇の御山に立つ神火に焼き
夏は荒潮の逆巻く鳴門の九重の怒濤の渦潮に祓い
秋は満月に照映る十和田の藍青色冴ゆる湖水に洗い
冬は旭日に光さす富士の峰に積む白雪に清む
省み恥ち悔い畏れ覚りて諸々の
枉汚禍過迷疑妬誂偽の罪
貪怒貧病乱狂盗争殺の
気枯を焼祓い洗清め
天祖神を中心に立て身の分限明らめて結え生む
大道を世界人類の道徳として實行う由
見看し聞食せと
恐み恐みも白す

一切成就大祓（みなるのおおはらい）

掛巻くも綾に畏き
天祖神は全く清く浄き天地を宮居となし給う
一切産霊に成就ると　恐み恐みも白す

三種大祓（みくさのおおはらい）

人は映の様に澄みたる霊覚にて中心を結え
玉の温かき仁愛にて森羅万象を包み
太刀の厳しき勇気にて悪しき根源を断ち

焼祓い洗清めて仕奉ると　恐み恐みも白す

四魂大祓

掛巻くも綾に畏き
天祖神は人の霊魂に四魂の活動を与え給う

和魂は親にて万物万象を調和え完成すの活動
幸魂は仁にて一を多とする創造り進歩の活動
奇魂は智にて多を一とする整理め清浄の活動
荒魂は勇にて矛盾を中心に結え顕現むの活動を発露す
愼しむは心の変化にして人左に寄り右に就く時
親は狎疎となり仁は逆憎となり

智は狂愚となり　勇は争怯となる
常に省み恥ち悔い畏れ覚り　燒祓い洗清めて仕奉ると
恐み恐みも白す

御霊清大祓

掛巻くも綾に畏き
天祖神は大元霊にましまして　生きとし生くるに
分御霊を与え　祖宗父母を通して肉体を頒ち給う
御霊は有りて在る實相にて　物質は流転流動る仮相なり
人は万物の霊長にして　御霊は一つ　肉体は分る

これ天祖神の自他一如にして　御霊は主　肉体は従なり
この故に
心の目に諸々の清を見て　肉体の目に諸々の汚を見
心の耳に諸々の清を聞き　肉体の耳に諸々の汚を聞き
心の鼻に諸々の清を嗅い　肉体の鼻に諸々の汚を嗅い
心の口に諸々の清を言い　肉体の口に諸々の汚を言い
心の身に諸々の清を觸れ　肉体の身に諸々の汚を觸れ
心の意に諸々の清を想い　肉体の意に諸々の汚を想う
心の本清く　本と影は双に清し
時の間に間に心は　怒り　哀み　損　得　に狂い

物質に迷いて己を中心とし　御霊はくもり易し
心に清　汚　合せ結え　天祖神を中心に立て
身の分限明らめ　主　従　共に浄き御霊は
神の子　神の生宮と顕現し給い
永久の生命光明を得さしめ給えと　恐み恐みも白す

幽界　魂　清　大祓

かくりよのみたまきよめのおおはらい

阿奈畏き
幽界の人間の霊魂　虫　魚　鳥　獣　草木　花實　岩石　金鉄
諸々の精霊は　三千年以来　現界に生存ます時

人の霊魂は　自我を中心に　物力を根本に
利慾色慾に迷いて　罪気枯を積重ね
妬　誹　偽　盗　争　殺もて
一時の栄枯盛衰を競争い　一生を終焉し者多し
斯て幽界に逝ける霊　引落されし霊　両親のため
胎内にて葬られし霊　戦場の　或は　常時の掟により
罪なくして刑を受けし霊　生命を己にて絶ち
絶たされたる霊達は　迷　霊　恨　霊となり
一方　虫　魚　鳥　獣　草木　花實　岩石　金鉄の精霊は
自然の法則　運命の間に間に　自己の肉体を犠牲になし
万物の霊長たる人類に服従奉仕す　は　深く感謝する処
なるも　人に憑き　或は使嗾れし精霊等は　呪の霊となり

天祖神を中心に　精神を根本に　身の分限明らかに結え
道　理を立つる大道を實行い　天極にある神界へ
又は元の精霊の故郷へ歸還るを許され給いて　永久の
生命光明を得さしめ給えと
恐み恐みも白す

ことたま たたえ のりと
言霊　贊　祝詞

掛巻くも綾に畏き
天祖神は隠身にして　言霊に通い　出現れ給う
言霊は有りて在る永久の生命光明なり
「ン」の父音に結え「アイウエオ」の母音に開き
「フ」を中心として子音に生れ　五十音を構成る

相共に暗闇に彷徨　呻吟きて荒狂奔うなり
これ専一に自我のなせし行為の報酬　自己の縁による
発現なりと　人精霊は深く省み恥ち悔い畏れ覚りて
天祖神の御神徳に依り　速かに罪気枯を焼祓い
洗清め給え
宇宙は「限定」の御代を迎え　三六の社会を成就すため
神幽現三界の万霊を過現未を通し　一柱に貫結え給う
大御心により今　万霊達は天祖神の御救済
御恩沢を得るの千載一遇に遭遇るなり
この故に
幽界にます人間の霊魂　諸々の精霊は霊眼を開き

各融合離散れて言葉の綾となり霊質物質を通し
百千万億兆の書籍教典に成り智慧を与う
言霊は天地に充満ち四海に反響い悠久より永遠に
生き通す人類は言霊によりて霊長の任務を果し
言霊のマスミに澄み切る時元一つの天祖神に
貫きて皆通う「言霊は神なり神は言霊なり
言霊は幸はえ給え」と賛言を恐み恐みも白す

かみのみちののりと
大道祝詞

掛巻くも綾に畏き
天祖神の大道は天祖神を中心に精神を根本に

身の分限 明らかに結え 道理を立て實行うなり
人間は神の御慧沢により生れ活かされ
万物は一時 委されたる借物と覚りて廣く厚き
御恩頼を感謝し 大御前美しく仕奉るなり
夫は 貞清らかに妻を愛しみ 妻は 操堅くして
愛しみを受け 家庭明るく整え 身は健康にして
活動を樂しみ 天壽を保ちてミコトに仕奉り
世界人類は一家同族 森羅万象は同根同胞と結え睦み
豊榮に称榮ゆくは これ天祖神の大道にして 人類の
實行う道徳の根本なり 常に省み恥ち悔い畏れ覚り
燒祓い洗清めて 天祖神の御教訓ましし大道を 世界人類の
道徳として 實踐い 勤め 仕奉ると 恐み恐みも白す

感謝祝詞（いやひのりと）

掛巻くも綾に畏き
天地根本太御祖大神は　生きとし生くるに分御霊を
与え給う大元霊なり　天地を開き給う間に間に

地球を修理固成て　春夏秋冬の寒さ暑さ　昼夜晴雨を
執行い　火水土空気光熱等　あらゆる物質を与え給う
天祖神は宇宙を貫く　實相　にして
天律　神則　道理　産霊　眞理　なり
博愛　智慧　言霊　生命　光明　なり　大精神は
雄々しさ　逞しさ　おほらかさ　明朗さ　荒々しさなり

天祖神は人間に分御霊とミコトを与えられ
神の生宮として神界より現界に遣され　祖宗父母を
通して肉体を受けしめ　衣物　食物　住居と万物を
貸し与え　養育い保護り美装し給う
己の心は豊かに楽しく　身は健かに康く　生業に務め
家庭円く治まり　世界人類　森羅万象と共に存し
共に栄え　日に新に　日々に新に進み歩む　今日も亦
深厚き慈悲仁愛の御親心と　高く尊貴き御恩頼を
感謝し　大御前厳しく仕奉ると　恐み恐みも白す

一体の祝詞（ひとつののりと）

掛巻くも綾に畏き
天地根本太御祖大神は　宇宙を宮居となし給い
空間　時間　霊質　物質を通して　神　幽　現の　三界を
統治し給う　人間は天祖神から分御霊とミコトを
賜り　祖宗父母を通して肉体を受け　神の生宮　祖宗の
自己顕現として誕生る
宇宙と己は空間を通して一体なり
宇宙に広大き空間ありて　己に狭小き空間あり
己に狭小き空間ありて　宇宙に広大き空間あり

宇宙の空間は縮少くして　己の空間を中心に集り
己の空間は拡大くして　宇宙の空間に満つる
宇宙は一球にして　己は広大き天地なるを知る
宇宙と己は時間を通して一体なり
宇宙に永遠の生命ありて　己に一時の壽命あり
己に一時の壽命ありて　宇宙に永遠の生命あり

宇宙の生命は圧えて　己の一生を中心に集り
己の一生は脹みて　宇宙の生命に満つる
過去　現在　未来は　時間を通し　一聯にして己は永遠の
生命なるを知る　天祖神と己は霊質を通して一体なり
天祖神に大元霊ありて　己に分御霊あり

己に分御霊ありて　天祖神に大元霊あり
世界人類生きとし生くるは　分御霊を通し　一根にして
己は有りて在る御霊なるを知る
天祖神は
己の目を通して　宇宙の相を見
己の耳を通して　宇宙の音を聞き給う
己の鼻を通して　宇宙の香を嗅い
己の口を通して　宇宙の言を宣り給う
己の手を通して　宇宙の面を固め
己の足を通して　宇宙の道を歩み給う
己の身を通して　宇宙の象を現し

己の心を通して　宇宙の心に服従はしめ給う
更に頭髪と脚は大空大地に通い　吸う息　呼く息にて
神の生命を新しく受入れ　左右の眼玉は　天極と
星　日　月に結え　七色の美光を放つ
宇宙と己は　物質を通して一体なり
天祖神に宮居の宇宙ありて　己に生宮の肉体あり
己に生宮の肉体ありて　天祖神に宮居の宇宙あり
宇宙は縮少くして　己の肉体を中心に集り
己の肉体は拡大くして　宇宙に満つる
星の瞬くは己の瞬く　日の光るは己の光るなり
地球の廻るは己の廻る　月の照すは己の照すなり
花の咲くは己の咲く　鳥の啼くは己の啼くなり

雪の降るは己の降る　人の樂しみは己の樂しみなり
山川草木森羅万象は　原子を通し一元にして　己は

天地と共にある實相なるを知る　この理にて　空間
時間　霊質　物質　を通し　天祖神と己　宇宙と肉体は
一体にして神　幽　現の　三界に通う　この故に己は
天祖神に守り護られ　宇宙に生かし活かさるる尊き
神の子　神の生宮なりと覚し給い「限定」の時代を迎え
新しき四海の波浪安定き大御世を　現界に開顕しまする
大御神業に結え給い　真一道に仕えしめ給えと
恐み恐みも白す

魂新替（たまあらかえ）　祝詞（のりと）

掛巻（かけま）くも綾（あや）に畏（かしこ）き
天地根本太御祖大神（あめつちもとのおおみおやのおおみかみ）は　宇宙（あめつち）の「創造（つくり）」「統一（まとめ）」
「自在（かって）」「限定（きまる）」の時代（とき）を一聯（ひとつらわ）の環（たまき）の様（さま）に仕組（しく）み給（たま）う
「創造（つくり）」の時代（とき）　眞空遥（みそらはる）かに　天極（あめのもとみなか）を御中心として
億兆（もろもろ）の星雲（ほしなみ）を運行（まわ）し給（たま）い　その内（うち）に一（ひと）つの宇宙（あめつち）を
造（つく）り　太陽（ひ）を中心（みなか）として　地球（たま）　月等（つきら）を廻転（まわ）させ給（たま）う
悠久（ひさ）しき太古（おおむかし）　天地（あめつち）を開（ひら）き給（たま）う間（ま）に間（ま）に　地球（たま）を
修理固成（つくりかため）て　山川陸海（おかうみ）を象（かたと）り　季節天候（ときひより）を執行（とりおこな）い
岩石（いわ）　金鉄（かね）　木草（き）　花實（くさはなみ）　虫（むし）　魚（さかなとり）　鳥　獣（けもの）を殖（ふや）し
原始（もと）の人間（ひと）を創造（つく）り給（たま）う

「統一」の時代となり　人間は神そのままの精神にて
大道を實行い　久しく神代として精神文化は
進みたるも　物質文明は幼稚なり　ここを以て
「自在」の時代を許し給い　人類は　自我を中心に
物力を根本に利慾に走り　妬　誹　偽　盗　争　殺
もて　一時の榮枯盛衰を競うに至る
天祖神は各の使徒を遣し給い　神儒佛同基の宗教の
開祖として　異なる経典を通し　大道　道徳を教化え
精神の鍛錬　霊魂の救済を伝えさせ給いたるも
本　末　を誤り　偶像　建物　に狂い
祭礼　利益　に迷う者等現れたり　近き世に至り
物質文明は大いに開発け　生活は進歩たるも

道義は廃れて社会は混迷を加う
「限定」の時代を迎え　天祖神は天祖神の大道を
古に復元し　厳御代の足御代を　現界に再現さんと
経綸み給いて　人類の魂新替給う天機至りたり
霊眼を開きて三千年以来の行為を省み恥ち悔い
畏れ覚り　罪気枯を焼祓い洗清めて　聖旨に服従う
人間は　幸福繁栄を得て　永久の生命光明を賜わる
今日も亦　心豊かに楽しく　身健かに康く　生活は
満ち足り　世界も家庭も円く　大元霊に結え給いて
豊栄に称栄ゆる新しき大御世を　迅速く開顕き給い
奉迎め給えと　大御前に畏敬い乞祷みて仕奉ると
恐み恐みも白す

竜王大神のりと　祝詞

掛巻くも綾に畏き
竜王大神は　宇宙の府に座し座す天祖神の
御使いにして　大建替の「限定」の御代を迎え
動静解凝引弛合分の八大神徳を御発動き給いて
人類の「自在」の御代に犯せし諸々の罪気枯を
焼祓い洗清め　世界人類を大道に復古し　三千年以来の
社会の混迷を覚醒さんと　ここの聖地に降臨れ給う

魂新替の神機に至り　七種の御神宝を開き給う
竜王大神を尊み敬いて　天祖神のもと　厳御代の
足御代になし賜えと　乞祈奉り　真一道に
御仕え申す由を　見看し聞食せと　恐み恐みも白す

御祖宗祝詞（みおやのりと）

天地（あめつち）の眞理（ことわり）を覚（さと）りて　各（おのもと）本の宮居（みやい）に帰（かえ）り給（たま）い
永久（とわ）の生命（いのち）光明（ひかり）を得（え）て　弥栄（いやさか）えしめ給（たま）えと祈（いの）り

子孫（うみのこ）は勲功（いさおし）を賛（たた）え　高（たか）き恩愛（いつくしみ）を感謝（いやひ）し　家庭（にわ）まるく
治（おさ）め生業（なりわい）に努力（つとめ）まつる状（さま）　所看（みそなわ）し所聞（きこし）めし　常盤（ときは）に
堅盤（かきは）に守（まも）り　幸（さき）はえ給（たま）えと　恐（かしこ）み恐（かしこ）みも白（もお）す

二礼二拍手一礼